

水への『思い』に込められた値段

東京大学助教授 菅 豊

ご紹介にありましたように、私の専門は民俗学という学問を専門にしております。民俗学といっても皆さんご存知でないと思いますけれども、人々の生活の中から、特に伝承されてきた生活の中から学んでいく学問であります。全体の話の中で私の話が一番マイクロな話、人そのものが登場する話になるかと思います。したがって地球規模の水危機とかに直接敷衍できるような話ではないということ、予めエクスキューズさせていただきたいと思っております。

私は民俗学の立場から「水への思いに込められた値段」ということについて今日はお話しますが、ここで“値段”と書きましたが、話の最後に値段というところまで行き着けるかという非常に心もとない、せいぜい「思いに込められた価値」という部分まで行ければいいかと考えております。

水をめぐる価値の多様性

「水は方円の器に従う」という諺があります。水そのものに形がなく、入る器に従ってその形を変えていく。この水の状態の諺から転じて「人間も育った環境によって良くもなれば悪くなる」という意味に使われています。水はそのように形を変えるだけではなく、方円の器に従ってその価値も大きく変えて参ります。例えば、コップに水を入れた場合、水そのものの価値は決まります。この状態で車を洗う水に使うと思う人はいないわけで、たいていコップに入れた水は飲み水として使う。このように、ある種入れ物・器によって用途が決まって参ります。

この器の一つであります川のお話をいたします。大きな器としての川を見ていきますと、飲料水、農業用水、洗濯をしたり、魚を育てたり、あるいはその魚を捕る場としての水、さらに木材を流したり、人を運ぶための水、上流部にダムを作ればそれは動力源として発電の源としての水、人が遊ぶための場所としての水、もっと突き詰めていけばゴミを捨てる場所としての水など、非常に多様な価値としての水があります。

その多様な価値が、人間と水の間非常に多様な関わりを生んでいく状況にあります。水が多様な価値を持っているがゆえに、人間は多様な関わり合いをしていく。これは私が改めて説明するまでもない事実であります。

一方で、人間と水とが多様な価値に基づく多様な関わり合いを長年続けていくと、さらに水をめぐる別の“新しい価値”を生み出していきます。この価値とは、水自体そのものが持っている価値ではなく、人間と水とが関わる中で獲得された価値というかと思います。もっと具体的にいいますと、関わりによって生まれる社会的価値・精神的価値、これを『思い』という言葉で今日は表現したいと思っておりますが、こういうものが水と関わる中で生まれてきます。

新潟県岩船郡山北町塔下の事例

先ほどお話しましたように私の専門は民俗学で、研究のベースにフィールド・ワークがあります。実際にムラに訪れて人々と会って、人々と同じように話を聞くだけではなく、一緒に労働したり、一緒にものを食べたりして生活することを長くやっていきます。今日は、私が学生時代から20年来やって

いるフィールドで、新潟県岩船郡山北町大川という新潟で一番北の川の紹介をいたします。山北町の一番北を流れている大川の谷筋のことを、この地方では大川谷といいます。この山北町では、面白いことに、このさらに南に流れている勝木川には八幡谷という谷の名前がついています。この谷ごとに人柄も違えば考え方などが違ってくるといわれており、土地の言葉ではこれを“水柄”と表現します。「八幡谷とは水柄が違うから意見があわない」とか、逆に「自分たちが同じ水柄だから一緒にやっっていける」という、我々が良く使う人柄・土地柄と同じように“水柄”という言葉がこの土地では使われます。そのような「水柄」を共有する場所がこの大川となります。2級河川で非常に美しい川で、夏場にはアユ漁を、冬場にはサケ漁を行います。

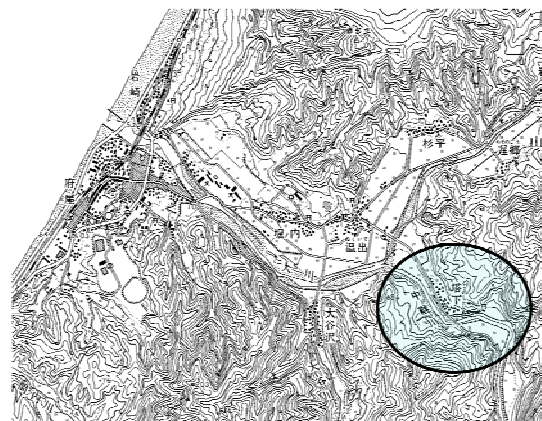
水と人との多様な関わり合いについて、この大川沿いにある塔下という集落について、まずお話しをしていきます。かつて塔下の人々は大川の水に非常に多様な価値を見出し、それとの多様な付き合いを持っていました。塔下の人々にとって大川の水は、まず農業

用水として非常に重要な意味を持っています。農業用水を川から引く堰のことを、この地域の人々はセキネと呼びます。セキネを利用する家々は共同で堰を管理するのですが、その人々のことを“タゴウの衆”といいます。タゴウの衆は共同管理して堰を作る材木をムラから買います。その費用は、ムラの会計(村マンゾウ)に繰り込まれ、余った費用はムラの中で平等に分配していきます。さらに、隣の集落の人が塔下の集落の堰を使う場合、隣の集落から使用料をもらっていきます。

その次に、漁業の場としての水というのが非常に重要な意味を持っています。塔下のムラの成員になると、昔はサケ漁を誰でもやってよかったのですが、その代わりに漁場はムラが管理し、入札していました。漁師にお金を払ってもらい、そのお金をムラの中に還元させることになっていました。

また塔下の大川の水は交通路としても非常に重要な意味を持っていました。塔下の上流部には森林地帯が非常に広がっていて、そこから木を切りだし、木を上げる場所として利用され、そこからも収益が上がりました。さらにムラの人たちが共同で水車を建て、大川の水を動力源として使っていました。

さらに大川はお金を稼ぐ共同労働の場でもありました。“川普請”という川の改修で、今でいう土木工事の公共事業になりますが、かつて昭和初期はムラが担っていました。その際も大川谷村という大きな行政単位から助成金を得て、その他にも近在の有力者から寄付金をもらって参加人数に応じて配当していました。昭和15年の例でいいますと、8月29日～9月4日まで延べ161人の村人が働き、ちゃんと日当をもらいます。その際、日当をもらう原資は大川谷村からもらい、さらに地元の有力者から寄付をもらう。このように大川をめぐって塔下は非常に直接的な経済的価値を見出してきたわけです。これは非常にわかり易い価値として水を捉えることができると思います。



経済的価値以外の価値

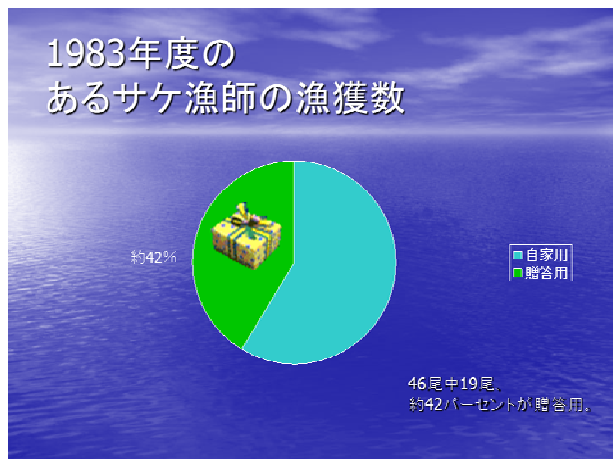
ただし、経済的価値でのみ、水を捉えることはできません。次に経済的価値以外の別の価値についてお話したいと思います。塔下では、サケ漁が秋から冬場にかけて行われます。それはもちろん経済的な意味をかつて持っていました。ところが、単純に経済的な目的で行われてきたわけではなく、人々の関わりが漁業の中で創出されていたのです。その点について、「小屋での親密な関係」と「贈答」という二つの側面についてお話したいと思います。

大川では、漁を行うために各個人が小屋を作り、サケがたくさん上る頃になると、その小屋に泊まり込みます。夜良捕れて、昼間はあまり捕れないので、昼間には漁師さんたちが小屋から出てきて隣の小屋を行ったり来たりして、たいてい「下流のところでたくさん捕れた」とか、「何匹逃がしたから上に上ってきている」といった情報交換をしています。このように情報を伝える、あるいはそれを聞きに行くことの他に、「顔を見る」という重要なことがあります。おじいさんの小屋にいと別のおじいさんが「何々の顔を見に来たぞ」という言い方をしたり、一緒のおじいさんがよその小屋に行く時に「何々の顔を見に行こうか」という表現をします。まさに“顔を見る”ということが非常に重要な意味を持っている。情報交換といっても、実際小屋で話していることはサケ漁の話ばかりではなくて、日常の生活の話、日常のムラの話、様々なことがここで行われているわけです。つまり小屋の生活が、川の中での人間関係として成立している。単純に漁業としてやっているのではなくて、漁業をやっている川の生活の中に人間関係が埋め込まれているといるかと思えます。

もう一つの人間関係を表す事象に“贈答”があります。1983年にある漁師が捕ったサケの利用方法を見てみます。まず、“ハツナギリ”と呼ばれる最初のサケは9月29日に捕られています。この町の面白い風習として、最初に捕れたサケを集落の人に必ず配ることになっているのです。30軒も家があると、1匹を30軒分に切って配っています。2匹目以降の利用を集計しますと、実に42%が売ったり自分で食べたりするのではなく、人にあげているのです。残りの58%でも、塩引きにしてから配ると



捕獲日	種類	量(斤)	漁獲後の利用法
9月29日	メス	2100	2匹のサケ(1)
10月1日	メス	2070	贈答(2)
10月4日	メス	2120	贈答(3)
10月8日	メス	2750	山形県産の魚(4)
10月11日	メス	2100	山形県産の魚(5)
10月14日	メス	2750	贈答(6)
10月17日	メス	1470	贈答(7)
10月20日	メス	2500	贈答(8)
10月23日	メス	2000	贈答(9)
10月26日	メス	2100	贈答(10)
10月29日	メス	2100	贈答(11)
11月1日	メス	2100	贈答(12)
11月4日	メス	2100	贈答(13)
11月7日	メス	2100	贈答(14)
11月10日	メス	2100	贈答(15)
11月13日	メス	2100	贈答(16)
11月16日	メス	2100	贈答(17)
11月19日	メス	2100	贈答(18)
11月22日	メス	2100	贈答(19)
11月25日	メス	2100	贈答(20)
11月28日	メス	2100	贈答(21)
12月1日	メス	2100	贈答(22)
12月4日	メス	2100	贈答(23)
12月7日	メス	2100	贈答(24)
12月10日	メス	2100	贈答(25)
12月13日	メス	2100	贈答(26)
12月16日	メス	2100	贈答(27)
12月19日	メス	2100	贈答(28)
12月22日	メス	2100	贈答(29)
12月25日	メス	2100	贈答(30)
12月28日	メス	2100	贈答(31)
12月31日	メス	2100	贈答(32)



いうものもありますから、半分近くは人にあげている。これは非常に面白い現象だと思います。自分で捕ったものを自分で食べたり売ったりするのではなく、たくさん人にあげているのです。

この“あげる”ということが、このムラでは非常に重要な意味を持っています。日本の贈答文化を考えると、決してサケに限られたことではありません。この地域でもサケ以外にたくさん取れたものなど近所に配りますし、都会に出ている子供が珍しいものを持ってくると必ず近所に配ります。そういう贈答の一つの枠組みの中にサケが入っているのです。

このサケ漁は漁業、経済活動でありながら、ムラの関わりの一部を成しています。サケ漁を経済的に把握しようとする、サケの値段を把握できるかもしれませんが、それだけでは把握できない人間関係が、サケの存在自体に込められているといいます。「関わり」という繋がりが再確認されていることを、この中に読み取ることができます。

川原に集まる女たち

次に、女の世界についてお話しをします。サケ漁は100%男しかやりませんが、女性は川原で畑をやっています。そこでは、私が見た限りでは100%女性が畑をやり、畑を男がやることはないし、サケ漁と女がやることはありません。この地域で「カワラバタケ」といわれる河川敷の菜園でも、非常にサケ漁と似たような現象が見られます。カワラバタケはきっちりとした畑ではなく、川原をちょっと掘って作って、大水が出たらすぐに流されるような非常に不安定な耕作地です。しかし、そういう不安定・不完全な畑でありながらも、その中にある種の不文律と人間関係が込められていて、曖昧な所有意識が存在しています。カワラバタケは、川原の一部をパッチ状に切り取ったような形に作ってあり、最低でも石を取り除くくらいの手間は掛けています。

私がお世話になってずっと泊めてもらった家のおばあさんが5~6年前、もう年を取ったので、このカワラバタケを止めました。彼はずっとそこにカワラバタケを持っていて、一生懸命やっていたわけですが、止めた後、その場所は荒廃していきます。ここは私有地ではない川原にもかかわらず、周りにいる人は、ここに手を出しません。何故かという、ここは私がお世話になったおばあちゃんの場所だという認識があるのです。そこでおばあちゃんが近所のおばさんに「その場所をあげるよ」という宣言をしました。さらにその宣言だけでは済まなくて、そのもらった方は、プラスチックのバケツとビールを持って来たのです。それによってその人は大手を振って使えることができますし、また周りの人も、そこを誰かが使うということを認知するようになるのです。

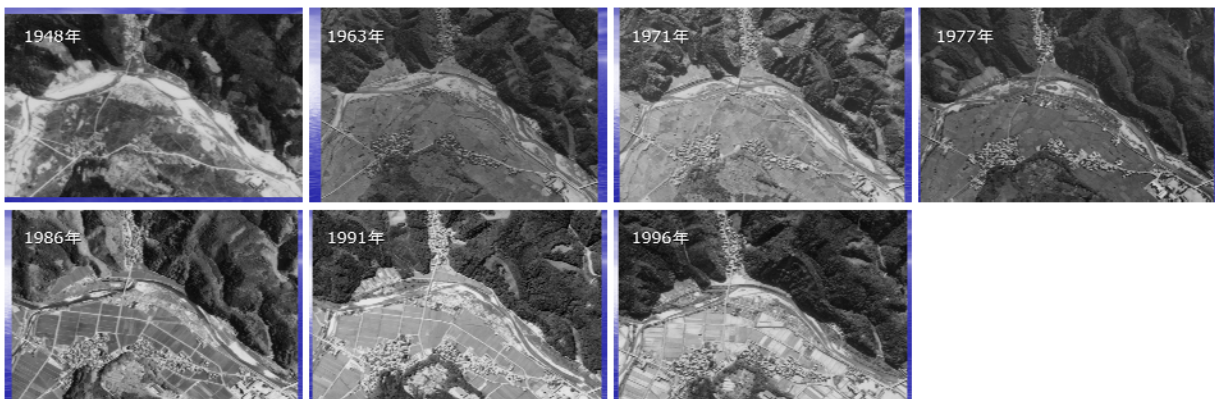
今いったお話では、やはりそこに「おばあちゃんのものだ」という認識が存在する。しかし、いわゆる所有権のような“1㎡あたり何十円”というような価格がつくようなものではない、人間関係によって



成立している一つのカワラバタケの利用が見えてくるわけです。そういう女性の川をめぐる人間関係が存在しております。

このカワラバタケの変遷について紹介しますと、塔下には堀ノ内、温出、大谷沢という三つの集落があり、この中に流れる大川を三つの集落で利用していたのです。1948年は食料難の時期でしたから、積極的にカワラバタケを利用していました。ところが1963年になると堤防ができて、堤内の河川敷が、“洪水が来ないところ”と認識され、畑として使われています。後にここは、国有地を払い下げて、三つの集落で分割をしています。他の部分は大きな田んぼが連なるのですけれども、この部分になると急に小さな畑が並ぶという面白い景観が、現在も残っています。1971年になっても、川原自体の畑はあまりありません。ところが77年に若干減少し、86年にまた増え、91年になると一気に増え、96年になると山際側まで広がっていきました。恐らく河川改修に伴って安定したという要因があると思いますが、もう一つ大きな要因が考えられます。

一方、台地上を削った普通の畑に注目すると、台地上の縁辺部に森が少し残っているのですが、この輪が段々と内側に年々と迫っています。このように山の畑がどんどん狭まる一方で、川の畑はどんどん広がっているのです。この原因の一つには、労働者が高齢化して山の畑に行くことが辛くなったということもまず聞きました。もう一つは、この山の畑は二つの集落の人が持っているのですが、持っている人が限られている、つまり土地所有者が私有地ですので限られているのです。あるおばあさんは、「自分はこの山の上に畑を持っているのだけど、もう今は川原にしか畑を作らない」というのです。山の畑昔お金を稼いでいた、作物を作っていたところですけども、「自分は年金だけで暮らせますから、もうそこには行かなくてもいいのです。そこに行ってもあまり面白くありません。こっちの川原に行くと自分が食べる分だけ作れば良い。食べる分というよりも、こっちに行くとき色々なところから人がやって来ます。「人に会える」と、ここでまた同じように“顔を見る”というのです。さらに、おばあさんたちは単に顔を見に行くのではなくて、川原に「働き」に行くというのです。サケ漁に行くおじいさんたちは自分たちのやることを決して「働く」とはいわないのですけれども、このおばあさんたちはそういうのです。このムラの社会の中でも畑を耕すことは非常に価値の高い行為として、“働いている”と認識されています。それで、働きながらそこで人に会えるということです。水辺の畔にある川原で働く行為、水辺で菜園をする行為は、働くとか人の顔を見るというような形で機能をしています。つまり菜園自体がムラの中で関わりの一部を成していると思います。



人々の関わり場

菜園と漁業の話をしました。それだけに限りません。例えば、人々の農業用水を使うグループであるタゴウの衆は、一種のお祭りをしたりします。つまり水をめぐる行動が、何らかの関わり合いの一部を成している、簡単にいうと「水の関わりに社会的な価値がある」ということです。コミュニティが強い、コミュニティがしっかりしているところには信頼・ノルマ・ネットワークというものがあり、そのおかげで関わっています。いわゆる共的なあり方、協調行動というものがありました。ところがコミュニティが弱くなっていきますと、ムラの中、コミュニティの中における、信頼・ノルマ・ネットワークが小さくなってきます。そうすると、関わり合いのパフォーマンスが低くなって来ます。これが現代の、例えば、東京の都市社会です。人々が外部から来て、まとまっていけない社会では、「隣は何する人ぞ」という状況になると捉えることができます。

しかし、私はそこを逆に考えました。特に関わりを作ることによって、コミュニティが変わっていくのではないか。その関わりを作るのにあたって、水が非常に重要な意味を持つのではないか。水との関わり合いを高くすることによって、信頼・ノルマ・ネットワークを強化し、いわゆる Social Capital を強化する。それによってコミュニティを維持していくのです。

水をめぐる関わり合いは、社会的価値を持ち、なおかつその社会的価値がコミュニティの維持に重要な役割を果たすと考えています。ですから水の価値の中にそういうものが込められていると主張したいと思います。

水をめぐる精神的な価値

次に精神的な価値についてお話しします。精神的な価値という、安っぽい言葉で“心象風景”という言葉があります。新潟県山北町の町勢要覧には、川を見つめる子供の写真とともに、「空から降った雨は山懐から染み出し」というキャッチフレーズがあります。これはムラの人が書いた言葉ではなく、町勢要覧を請け負った会社を作っています。我々はこれを見た時に、故郷イメージとしてノスタルジーな心象風景を感じるのですが、実際このムラで暮らしている人は別なものを見ています。例えば、子供が持っている道具です。この写真を撮った人は何か分からずに撮っていると思いますが、子供はこの道具を使った魚の捕り方や、川の中の深い場所や流れが速い場所といった危険区域などを、この川の中に眺めているのです。つまり心象風景という我々が普通に捉えるものとは別の、その土地の人にしか分からない“もの”や“こと”が、この写真を見た時に想起されると思います。これが本当の意味での私が考える心象風景、精神的な価値になると思いますが、これは大人の世界にも十分存在するわけです。



もう一枚、おじさんが川に座っている写真があります。川を掘って、その辺にある柳を取って来て束にして鉋を置いて、ウグイが上って来るのを待っているだけです。1~2 時間待っているとウグイが1 匹上って来るので、それパタンと倒して魚を捕ります。このおじさんは、釣り針も網も持たず、鉋と鍬だけを持って魚捕りに行きます。漁業という大きなものになってくると、例えば、ダムを建設する際には魚の値段で換算できますが、このおじさんがここでやっている行為は、非常に換算しづらいものだと思います。もちろんおじさんはこのウグイで食べているわけではないですし、売っているわけでもない。ただここでぼんやりと暮らしているわけですが、このことでおじさんが川に込めているぼんやりとした思いは、現金でカウントすることが非常に難しいということです



ウグイ捕り

もう一つ、これはおばさんたちが何か川に投げています。これは全国良くあるのですけれども、お盆に供えしたものを、お盆が終わったら川に流すのです。川を伝ってご先祖様が帰っていく、その為に川に流すという話が良く聞かれるのですけれども、ここでもいわゆる盆のお供えを川に流しています。このおばあちゃんは、私がお世話になったおばあちゃんなのですけれども、先ほど話したカワラバタケで自分が精魂込めて作ったスイカや花をお盆に供えた後に、お盆の最後ご先祖様の魂と一緒に流すのです。それでおばあちゃんは川に拝む。川というのは、単純な川ではなく霊魂とかも行き来する、そういう意味で彼女のお母さん、お父さんが行き来する場でもあるわけです。



盆のお供え

以上、水との多様な関わり合いがあるというのは、皆様ご存知だと思います。しかし、水の多様な価値に裏付けられる多様な関わり合いは、さらに水の価値を生む。今申し上げましたように、水には最初に経済的な価値があります。それ以外に、社会、信仰、儀礼、様々なポジティブな思いがあるわけです。それによってさらに新しい価値を生み出していくということです。

水をめぐる多様な「思い」

最後に一言申し上げるならば、今お話したのはあまりにもポジティブな部分ばかりです。公平にいうと、水は逆にネガティブな思いが当然あります。ここ数ヶ月の間に、多くの洪水を日本では経験しておりますけれども、そういう場所に行って非常にポジティブな思いばかりをいっても、現実には生きている人たちにとっては、空虚な話として受け止められません。水はやはり洪水、あるいは水が足りない渇水、水で死んでしまう水死など、様々なネガティブな思いも込められているわけです。そのように考えますと、明治維新後、中央集権の日本国家が一生懸命頑張って来た治水の工事は、一般民衆がネガティブな思いを克服しようとしてきた歴史だと思います。大水によって生命が失われる歴史を

我々は経験しているわけです。その意味でこの“ネガティブな思い”を大きく考えたために、“ポジティブな思い”を考えずに済んだ、見過ごして来たこととなります。しかし、ある程度洪水や治水を克服できるようになると、今度は“ポジティブな思い”があることに気付き始めるのです。ただここで強調しておきたいのは、気付き始めたただけであって、昔なかったわけではないのです。これは確実に昔からあった、価値として存在していた。そういうものをやっぱり我々はしっかり価値として認識していく必要があると思います。

最後に、水をめぐる多様な「思い」の必要性を強調しようとするのは非常に簡単なのですが、この価値には三つの特徴があります。一つが“触れることができない(intangible)”価値です。例えば、人が触ることができない社会的価値や、その土地の人しか知らないような知識や思いなどです。さらに“数えることができない(uncountable)”価値です。そしてもう一つ、これが大事なのですが“置き換えることができない(irreplaceable)”価値で、これは代償することが非常に難しいものです。そう考えますと、社会的価値や精神的価値など三つの性格を持ったものを値段に正当に評価することは、非常に難しいことでもあります。しかし、水の値段を考える上で、こういう価値は、いわゆるバイプロダクトに生産されただけという形で見逃すのではなく、水は根源的にこういう価値を含んでいるということを考慮する必要があるということを指摘して、私のお話を終わりにいたします。